

「中山世譜」の情報化

赤嶺 守：琉球大学法文学部

琉球では1650年に向象賢（羽地朝秀）によって初めて正史「中山世鑑」が編集された。「中山世鑑」は1701年に摂政尚弘才、法司向世俊、馬廷器、毛典相、総理司譜官尚弘徳、向和礼、伝崇道、校正官蔡鐸等が当官となり、首里王府編纂の王家の家譜・系譜として漢訳補訂された。これが今伝わる「中山世譜」である。この「中山世譜」は蔡鐸が中心となり漢訳補訂したことから、俗に蔡鐸本といわれている。蔡鐸は当時久米村が総力をあげて行っていた琉球国歴代の外交文書「歴代宝案」の整理・編集に総理唐栄司として関わっていた人物で、「中山世鑑」の漢訳補訂に際し「歴代宝案」に収められていた詔勅・咨文・執照・符文といった文書を多く用いている。記事末尾に「在案」とあるのは「歴代宝案」の史料利用を意味する。蔡鐸本は正附両巻からなり正巻は琉中関係の記事を中心に記し、薩摩・琉球関係は別冊として附巻に記している。

蔡鐸本はその後、国相尚徹、法司馬献図、尚和声、毛承詔、総宗正尚盛、尚文明、毛光弼、纂修司蔡温等が当官となり、1724年に「中山沿革志」「隋書」「宋史」「元史」などの史料を参照してさらに重修補訂されている。この重修は蔡温を中心になされたことから、この重訂本を蔡温本という。「世譜」はその後薩琉関係の「附巻」とともに、正史として廃藩時まで書き継がれている。内容は以下の通りである。

- 首巻：中山世譜序・凡例十条・当官姓氏・中山世譜原序・琉球輿地名号会紀・系図
- 巻1：歴代総紀・歴代総論
- 巻2：中山万世総紀
- 巻3：天孫紀・舜天王・舜馬順熙王・義本王・英祖王・大成王・英慈王・玉城王・西威王・察度王・武寧王
- 巻4：尚思紹王・尚巴志王
- 巻5：尚忠王・尚思達王・尚金福王・尚泰久王・尚徳王
- 巻6：尚稷王・尚円王・尚宣威王・尚真王
- 巻7：尚清王・尚元王・尚永王・尚寧王
- 巻8：尚豊王・尚賢王・尚質王・尚貞王・尚純王
- 巻9：尚益王・尚敬王
- 巻10：尚穆王・尚哲王・尚温王・尚成王
- 巻11：尚2N王
- 巻12：尚育王・王世子尚濬
- 巻13：尚泰王・王世子尚典

「琉球・沖縄の対外関係史」研究班（研究代表者：金城正篤）では正巻に歴代宝案関連記事が多いことから、宝案関連史料の統一した形での情報化を進める作業の一環として蔡温本の首巻を除く正巻部分の本文テキストを作成した。薩琉関係の附巻に関しては「琉球王国の構造に関する研究」研究班（研究代表者：豊見山和行）が本文テキスト作成をおこなっている。

「中山世譜」本文のテキストファイル出力サンプル

中山世譜卷一

歷代總紀

天地未分之初。混混沌沌。無有陰陽清濁之辨。既而大極生兩儀。兩儀生四象。四象變化。庶類繁艱。由是天地始爲天地。人物始爲人物。

時我琉球。闢在福州正東。偏南三里許。而分野。與楊州吳越。同屬女牛。星紀之次。俱在丑宮。

(福建。北極出地二十六度三分。偏度。去北極中線。偏東四十六度三十分。琉球。北極出地二十六度二分三釐。偏度。去北極中線。偏東五十四度。則琉球與福州。東西相去八度三十分。推算徑直。海面一千七百里)

蓋我國開闢之初。海浪汎濫。不足居處。時有一男一女。生于大荒際。男名志仁禮久。女名阿摩彌姑。運土石。植草木。用防海浪。而嶽森始矣。

嶽森既成。人物繁艱。然當時之俗。穴居野處。與物相友。無有价傷之心。

歷年既久。人民機智。物始爲敵。於時復有一人。首出。分郡類。定民居者。叫稱天帝子。

天帝子。生三男二女。長男爲天孫氏。國君始也。二男爲按司始。(按司即如中朝諸侯之類)三男爲百姓始。

長女爲君君之始。(君者婦女。掌神職者之稱也。君君者。令貴族婦女數十人。各掌神職。故合稱之曰君君。康熙之初。議減其數。而今有數職存焉)

次女爲祝祝之始。(祝者亦掌神職者之稱也。祝祝者。諸郡諸村。各有婦女掌神職者。故合稱之曰祝祝。至今尚存)

而倫道始矣。于是天孫氏繼治之間。相厥山川。分爲三區。一曰中頭。即中山也。一曰國頭。即山北也。一曰島尻。即山南也。教民烹 E08。而民利之。教民巢居。而民安之。

方是時也。書契未興。望月虧盈。以紀時節。候草榮枯。以定年歲。澹泊無爲。而俗自化。然當時之民。未知稼穡。逐捕禽獸。以爲食。拾收菓實。以爲飯。